王国に新茶の季節

家族総出で新茶摘み＝静岡市葵区、全日写連中村明弘さん撮影

一字一筆　静岡の今

若葉に降り注ぐ陽光が、日一日と強まってきた。八十八夜と夏至の間は、草木も花々も、鳥も虫も人も日をいっぱい浴びて、命を輝かせる季節である。

静岡でこの季節を最も謳歌（おうか）しているのは茶畑だろう。全国の緑茶出荷額の約6割を占める「お茶王国」静岡は、至るところに茶畑が広がる。たっぷりと陽光を浴びたもえぎ色のじゅうたんがキラキラと光る光景に、人は穏やかな気持ちになる。

お茶は、人の気持ちを和ませる。疲れて一休みしたい時、食事から活動に移行する時、ちょっと間が欲しい時、人はお茶を欲しくなる。

県内では教育の中にもお茶が入り込んでいるが、人を和ませる効用は子供の成長過程で必要なのかもしれない。県内有数の茶どころ、島田市には校内に200リットル入りの「給茶機」を備えた小中学校が6校ある。同市立第一小学校では運動場から校舎に入る場所の水道で蛇口をひねるとお茶が出てくる。児童たちは運動で乾いたのどを潤し、気分を変えて教室に入る。

静岡のお茶は、鎌倉時代の高僧・聖一国師が中国から持ち帰ったお茶の種を、故郷の静岡市葵区足久保に植えたのが起源と言われる。発祥の地に近い同市立足久保小学校（児童数241人）では5月11日、近くの法明寺献茶式でいただいた新茶を全校児童で味わった。子供たちが飲んだ本場の「本山茶」を23日、田辺信宏静岡市長が友好都市フランス・カンヌで開かれているカンヌ国際映画祭でPRした。

700年以上前に、国師がまいた一粒の種が、世界を和ませようとしている。

（前静岡県監査委員・富永久雄）